

# 船団

第115号

特集

口語の可能性

中井 保江

六月の土の匂いの祖父の膝

六月は三角時に不等辺

土曜日の冷蔵庫楽しさくらんぼ

大伯母の夏帽子ふわっ風おこす

蒸す街を着くずれてきて鱧料理

ビールほす宝探しの地図広げ

よーじやのあぶらとり紙油蟬

中居 由美

そら豆の莢の大胆実の大胆

国道を運ばれてゆく豆ごはん

街薄暑小さきパン屋の人だから

白い薔薇育て暮らしを開け放つ

走り梅雨体温計を三度振る

今ここにいるこの時間夏の夕

サイレンの遠ざかりゆく大夕焼

## ●会員作品●

中谷 三千子

夏みかん選るすかすかの骨密度

入口に出口調査の人の汗

冷素麺期日前投票済ます

木下闇自分を置いて行く気分

いまどきはナビで言うんだ道おしえ

くま蟬の下でじんじん待ってます

衿つめて着付け一人の藍浴衣

長沼 佐智

削ってる4B5本莖草

踏まないでここは国境赤のまま

秋思の道いつの間にやら切り通し

骨っ節強く正しく草の花

処暑のブルー、マリー・ローランサン気分

まず机、正座それから冬籠

ゲレンデにコーヒーを待つ永久に待つ

中林 明美

二十分強歩の汗をぬぐってる

脱ぎながら考えている夏の旅

夏霞青く嘶く馬を聞き

雷鳴の一瞬思わず正座して

日盛りをローラースケート抜けていく

口紅をくつきり夏を仕度する

台風に吹き寄せられて来た案山子

中原 幸子

梅雨かどうか手脚ばたばたする運動

すれちがう蛸千年まえの罪

し残して死ぬっていいな梅雨明ける

おっちゃんのおっちゃんによる鱧の皮

文月を小さく語るドロップス

さよならはゆつくり蟻は蟻のラブ

新涼のでもね、とメモの残されて

## ● 会員作品 ●

梨地 ことこ

カラスが蝉を老いがわたしを追っかける

緑陰に丸ごと横たう獣の骨

決別は素麺すすり終えてから

だめ！ カラス、日傘はひとり用だから

ハワイアン昼寝のように死にました

左目の瞼に住まわす赤蜻蛉

星今宵小口切りしてオクラのチップ

西村 亜紀子

美しい海月を飼って老姉妹

八月に鯨が来るといふ呷

顔博のヒマワリVSオニオコゼ

ヒマワリ咲くジャンヌ・モローパリに死す

反省の猿とヒマワリすれ違う

あの人がヒマワリだった頃のこと

地球の穴ドーナツの穴秋の風

原 ゆき

六月の朝よおもちやの雨を聴き  
いづれ死はほのあかくなる苺  
コンビニの枇杷つて輪郭だけ  
こんな夜は茗荷の息をしてください  
芍薬を山ほどいけて近寄る死  
もう寝るか胸にコスモス転写して  
月が壺であるならふちに足かけん

阪野 基道

密会ほたる袋へ阿修羅とさ  
ひとしれず微笑む狸もいっしょにさ  
遁世なら流しそうめんいっしょにさ  
石榴割れ真っ赤な嘘をつく……きぶん  
盆過ぎのしゃべり足らぬと僧の眉  
月光のあふれる閨の考妣かな  
月光浴び縄文からの夜を瀧く

● 会員作品 ●

東 英幸

土曜の午後鴉と枇杷の息遣い  
引き潮の匂いの中を枇杷熟れる  
貝殻に黄砂積もっている日なり  
コック帽なんじゃもんじゃの坂を来る  
愛犬を抱いて水やる夏の月  
梅雨の蝶群青の闇抜けて来る  
夕立のあとドーナツの揚がりけり

火箱 ひろ

白南風と来るくたくたの頭陀袋  
逆光のアダン裏返る島唄  
人を待つように海辺の夕焼け待つ  
もう体しなくなつて泳ぎ着く  
水切れの赤バラ黒くあり尖る  
要点の点のところごところてん  
かなぶんぶんまたすかたんをしてしまふ

陽山 道子

どくだみの匂う夕暮れ素の時間  
青葉して地球の鼓動よく聞く日  
歪むガラス戸ダリアが燃えている  
水無月のはなし短かな男前  
ガラス拭く今日一日を素手素足  
蜜豆のみつまめ的なふたり連れ  
ああそしてあとは無口に夏の月

平井 奇散人

大川のベンチの人も都鳥  
枕頭に寝酒漱石サザエさん  
ジェラートのメニュー指さす十二月  
冬の雷心斎橋の広東語  
婿はラガー正座の汗も冬座敷  
冬日向遠方の友癖字なり  
銀嶺や支柱も錆びるシエットコースター

● 会員作品 ●

福岡 貴子

この続き君に預けた心太  
花糸瓜また眠ってる記念写真  
青梅雨を駆る信号はずつと青  
昼時をねらう作戦青蜥蜴  
白南風 of 海へ自転車一直線  
あの手紙燃やしたきつと明日雷雨  
冬瓜どすかむつかしいことあらしまへん

ふけ としこ

百合がをります開閉はお静かに  
予約せむ水鉄砲を作る会  
外回りへざつと箒を朝の蝉  
青筋揚羽集まつて岩濡らしたる  
大吉のみくじ引き当て西瓜切る  
ざわわざわわ日焼け止め使ひ切り  
飛魚の羽を広げてみて買はず

つじ あきこ

徒然にもつれかけてるあめんぼう

蝉時雨課題難題処理早々

桃の実のお尻は歪素直な子

橋の上から送信済みの大文字

違う道歩いて水出しレモンティー

行ってみよう路地奥の奥おしろいへ

魂をくすぐっている猫じゃらし

津田 このみ

天神祭ふつと男の匂いかな

烏瓜咲きくちびるも触れそうな

頃合いの男と風と海紅豆

石灼けてほぼほ男根である

怒られぬよう盆花を選びおり

蛇目草またささくれの親不孝

今日やけに妻が優しい遠花火

## ● 会員作品 ●

津波古 江津

猫もうさぎも犬も埋めたな梅は実を

月に一度草刈にゆく一両電車

川ひとつわたつてもどる陽炎

今朝はこぼす甕いっぱい

萍 憂きわれと蛭にひるすぎのゆらぎ

あのとぎの暑い盛りの鯨幕

永遠に故障中なり夏の海

坪内 稔典

いつだって大好き青田に溶けるヤツ

揚羽来て百年前の庭になる

堤防にころぶ友情南風吹く

鰻食べて淀川までは約五分

いっせいにアガパンサスよ山々よ

宇野港といとこのように夏の月

立葵港へ続く道ほとり